

## 木村晟先生を送る

勝原晴希

歳月の過ぎ去りゆくその歩みは、まことに早い。駒澤大学国文学科に着任して以来私はすでに、水原一先生、畑實先生、富士昭雄先生、村上光徳先生、小野寛先生を、お送りして来た。そして今年また、三十二年の長きにわたって国文学科のために「ご尽力くださった木村晟先生をお送りしなければならぬ」。伝統ある駒澤大学国文学科を培い、支えて下さった先生がまたお一人、本学を去ってゆかれることに、先生の新しい歩みの始まりを祝福申し上げるとともに、残された者の心もとなさをひとしきり噛みしめるのである。

木村晟先生は昭和九年、滋賀県にお生まれになり、日本大学文学部国文学科に進まれた。日本大学での専攻は言うまでもなく国語学であり、以後官々として国語学研究の正道を歩まれている。大学卒業後、桜美林大学、神戸女子大学などを経て、昭和四十七年に駒澤大学に赴任された。その時より今日に至るまで、学部・大学院における講義・研究はもとより、学生の課外活動である国語学ゼミを週一回設けて国語資料の綿密な解読のご指導を続けられ、多くの後進の研究者の育成に努められた。また、平成元年より三年までは国文学科主任として、平成十一年より十三年まで

は大学院人文科学研究科国文学専攻主任として、学科ならびに専攻の運営に尽くされてもいる。

先生は物腰の柔らかな謙虚な方であり、赴任したばかりの私にも丁寧に対応してくださり、決して目下の者として軽んじることなく、いろいろなと懇切に教えてくださった。先生のいつも公平で謙虚な姿勢に、私などは恐縮することが多かったのである。学問内容については私など文字通りの門外漢で分かりかねるが、教育・研究の姿勢については綿密であり、細心であられることは、たとえば大学院入試における受験生との質疑応答に、また修士論文の口頭試問に同席させていただいた際に、強く感じたものである。先生に心服している学生を私は何人も知っているし、少なからぬ学生が、講義・演習に於ける先生の学問への情熱、厳格な態度について、誇らしく語つてもくれた。

先生の業績の膨大であることに、誰しも畏敬の念を禁じえないであろう。先生は日本辞書史研究、とりわけ中世・近世の辞書・往来物・韻書等の総合的研究、また典拠調査などを踏まえた辞書史的研究の解明に文字通り心血を注がれた。大空社より刊行された『古辞書研究資料叢刊』全三十一巻はその輝かしい結実であり、平成十四年刊行の『中世辞書の基礎的研究』（汲古書院）によって、博士（文学）の学位を取得された。研究室の整理をしておられる先生を訪ねた際に、これらの本はまだ研究に必要ですから、と書架を見やっただ先生の眼差しが心に深く残っている。先生のご研究は止むことなく、さらなる結果がもたらされることと信じる。一時、体調を崩されたこともあったが、すでに回復されているご様子である。どうか、ご健康に留意され、これからも私たちを導いていただきたいと、切にお願い申し上げる次第である。